



3	2	1
4	5	6

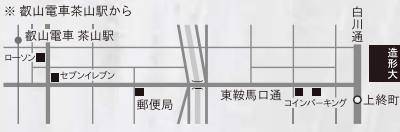
1. 大西康明 vertical emptiness (volume of strings) 2014
2. 大西康明 vertical emptiness [detail] 2014
3. 十腰内式土器 深鉢 [detail] 縄文時代後期
4. 縄文土器 深鉢 [detail] 縄文時代中期
5. 大西康明 untitled 2014 [撮影: 山中慎太郎]
6. 大西康明 vertical emptiness MO 2014



<http://www.kyoto-art.ac.jp/info/>

- JR・近鉄京都駅、京阪三条駅、阪急河原町駅から
京都市バス5番「岩倉」行き乗車、「上終町・京都造形芸大前」下車
(京都駅から約50分、三条駅・河原町駅から約30分)
- 京都市営地下鉄丸太町駅・北大路駅から約15分
京都市バス204循環に乗り、「上終町・京都造形芸大前」下車
- 京阪電車出町柳駅から
叡山電車に乗り換え、茶山駅下車 徒歩約10分

※駐車場はございませんので、お車・バイクでのご来場はお断りします。



京都造形芸術大学
〒606-8271
京都市左京区北白川瓜生山2-116
Telephone 075 791 9122(代)

お問い合わせ
京都造形芸術大学芸術館
Telephone 075 791 9182



縄文と現代 vol.3 ——— 浸透する器 2015年4月16日(木) — 5月16日(土) 京都造形芸術大学芸術館 人間館ギャラリー・オーブ2階
入館料: 無料 開館時間: 午前10時—午後5時 休館日: 日曜日(4/29-5/6 休館)

関連企画 1

講演「残されたかたち―縄文からみえるもの」
4月28日(火) 午後4時30分―5時50分
講師：千葉 毅 (神奈川県立歴史博物館学芸員)
会場：人間館 1 階 102 教室 (予約不要)

関連企画 2

対談：「空洞の彫刻、浸透するかたち」
5月16日(土) 午後4時30分―5時30分
講師：大西康明 (美術家) + 岡本康明 (京都造形芸術大学芸術館 館長)
会場：京都造形芸術大学芸術館 (予約不要)

大西康明 | 略歴

1979 年 大阪府生まれ。2001 年 筑波大学芸術専門学
群卒業。2004 年京都市立芸術大学大学院美術研究
科彫刻専攻修了。第1回秀桜基金留学賞、第10回 岡
本太郎現代芸術賞展 太郎賞受賞 (2007)。Vermont
Studio Center U.S. Japan Foundation Fellowship、
The Pollock-Krasner Foundation (2010)。ポーラ美術
振興財団在外研修員としてイギリスにて研修 (2011)。
第31回 咲くやこの花賞受賞 (2014)。

主な個展

2014 空洞の彫刻 / アートコートギャラリー, 大阪
vertical emptiness / Gallery OUT of PLACE, 東京
2012 inner space / Wilfrid Israel Museum, Hazorea
イスラエル
reverse of volume / Rice Gallery, Houston アメリカ
2011 体積の裏側 / 愛知県美術館, 名古屋

主なグループ展

2014 Maison & Objet - Landscape / Paris Nord
Villepinte, Paris フランス
想像しなおし / 福岡市美術館, 福岡
2013 Mono No Aware. Japanese Contemporary Art /
エルミタージュ美術館, St. Petersburg ロシア
Dreamscape - うたかたの扉 / 京都芸術センター, 京都
2011 世界制作の方法 / 国立国際美術館, 大阪
2010 Art Court Frontier #8 / アートコートギャラリー,
大阪



雪片が 風とともに舞い降り
地表と樹木を 淡い光で包んでゆく
ときおり吹雪となって 鋭く風の音が走り抜けると
凍てついた土の表面に 雪の結晶が残され
澄み切った静けさのなか 息も靴音も吸収して
音も無い白の光景が 立ちあらわれる

大西康明の作品《垂直の隙間》は凍り付いた露氷の
木立のように時を止め、色彩も失ったかのような静
寂の中にあった。仄暗い展示室の天井から逆様に吊
るされた木々の枝、その四方に広がる細い枝から垂
れ下がる帯状の糸には、雪雪に似た白い結晶が覆っ
ている。滴り落ちる無数の糸は地に着くと床一面に
広がり、瞬間凍土さながらの地面と化していく。
視覚からのイメージによって喚起される白の世界は、
しかし物質としての実態や質量を感じることはない。

むしろそのような現実感希薄でさえある。が、そこ
に漂う気配や空気感は圧倒的な強度を持っている。
それは紛れもなく彫刻としての強度であり存在感で
ある。大西の作品は、かつての彫刻作品にみられ
る中心性を持つ塊としての存在感ではなく、重さ
や量塊を排して日常の空間と繋がろうとするもので
もない。《垂直の》という理数系の言葉と《隙間》
という日本的抒情を持つ言葉をタイトルとして示さ
れる作品世界には、現代という時間軸の関係性の中
でしか見出すことの出来ない儚い存在性と、揺る
ぎない本来の精神性が共存している。それは自身
の行為と自然や現象との作用の先に形づくられる
作品ともいうことができるだろう。実は自然とは対
極にある無機的な素材（例えば小枝に吹きかける
尿素）に延々と途方もない時間をかけ制作する行
為性は、ある空虚を充たす彫刻的行為といえない
だろうか。
これまでの大西の作品の多くは、まるで蟬の抜け殻
を見るかのように殻（ガワ）だけを残して不在を暗示
する。今回の作品もまた《浸透する》という理科実
験を彷彿させる語に《器》という日本のモチーフを
つなげた主題のようだ。大西の作品《浸透する器》
は、歴史的時間を内包する縄文土器と同一空間で
どのように響き合うのだろうか。